

日本 ～4年ぶりの貿易黒字も景気に加速感はなく～

経済調査部 主任エコノミスト 柵山 順子(さくやま じゅんこ)

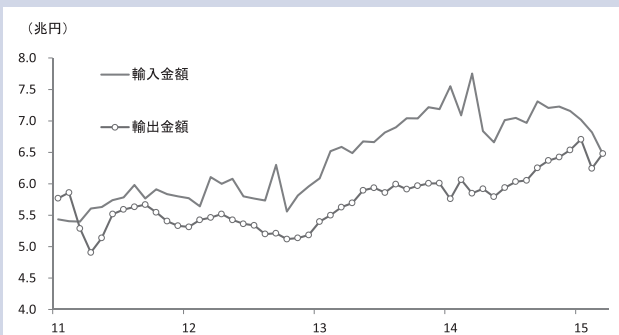
およそ4年ぶりの貿易黒字

財務省が公表した3月貿易統計によると、震災後、エネルギー関連の輸入金額の増加を背景に赤字が続いていた貿易収支(季節調整値)がおよそ4年ぶりに黒字となった。貿易赤字解消の主因は、年明け以降の輸入金額の急減少だ。原油価格の大幅下落を受けて、鉱物性燃料輸入金額は昨年1-3月期の8.0兆円から今年は5.4兆円に減少した。

また、無視できないのが輸出金額の堅調さだ。実質輸出は、米国向け輸出を牽引役に拡大が続いており、1-3月期も前期比+1.0%と三四半期連続で増加している。加えて、輸出企業が過去の円高基調の中で培われた競争力をもとに、円安局面でも値下げを限定的なものに留め収益を高める戦略を採ったことも、輸出金額を押し上げた。

先行きの貿易収支についてみれば、年明け以降緩やかに原油価格が上昇していることもあり、今後の黒字幅は拡大一辺倒というより、ゼロ近傍で一進一退となりそうだ。しかし、今回の貿易赤字解消は、原料価格低下による企業収益や家計購買力の増大と、稼ぎ頭としての輸出の堅調さを示している。海外からの助け舟が様々なルートで国内経済に波及することが期待される。

資料1 輸出入金額の推移(季節調整値)



(出所)財務省「貿易統計」

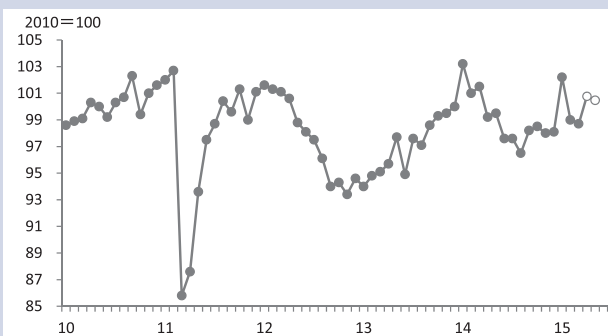
依然弱い国内需要

ところが、国内需要は依然弱い。まず、鉱工業生産であるが、3月の結果は前月比▲0.3%と2ヵ月連続減となっ

た。また、先行きを占う生産予測指数では、4月の生産予測が下方修正され、さらに5月の予測も前月比▲0.3%と冴えないなど、4-6月期が減産となる可能性も出てきた。

個人消費についても、家計調査は3月こそ前月比+2.4%としっかりと増加したものの、均してみれば横ばい圏内を脱していない。商業動態統計の結果も弱く、雇用所得環境の改善やマインド改善、ガソリン価格下落の恩恵など家計を取り巻く環境の改善が、消費に結びついた姿は確認できない。

資料2 製造工業生産(直近2ヶ月は予測指数)



(出所)経済産業省「鉱工業指数」

後ずれした物価目標の達成時期

こうした中、4月30日に開催された日本銀行の政策決定会合では、現行の金融政策が据え置かれた。同時に公表された展望レポートでは、消費者物価の前年比が2%程度に達すると日銀が想定する時期が、従来の「15年度を中心とする期間」から、「16年度前半頃」に修正された。

会見で黒田総裁は、物価の改善基調は崩れておらず、消費者物価前年比に対する原油価格下落の影響が剥落すれば、景気回復持続による需給ギャップの縮小や、春闘や人手不足を背景にした賃金上昇に伴い、物価は日銀が目標とする2%にむけて上昇してくるとの見方を繰り返した。

一方で、物価の基調に変化が生じた場合には追加緩和を辞さない姿勢を引き続き示しており、原油価格の影響が剥落する秋口にかけて、日銀の動向が注目される。